



～地域包括ケア病棟から地域をデザインする～

発行元：地域包括ケア病棟・リハビリ科・地域医療連携室

地域包括ケア病棟“彩り”で受け入れた事例(第24回)

～作業療法士の工夫により関係が築けた一例～

70歳代男性、おひとり暮らし。春頃から衰弱のため地域包括支援センターやケアマネジャーが定期的に訪問し、様子を見ておられたのですが、次第に立てなくなり、食欲不振で栄養状態も悪いことから、施設入所までの間、地域包括ケア病棟でお受け入れさせていただきました。

直系のご家族とは疎遠でしたが、唯一、姪御さんが面会に来られ、数年ぶりの涙ながらの再会を果たされました。姪御さんのご負担を考慮し、現在、行政と協力し後見人申し立ての段取りをしながら、今後の生活を任せることのできる有料老人ホームへの入居を目指しています。

(地域医療連携室 主任 中嶋 庸介)

入院4日目より訓練を開始しました。入院当初から他者とのコミュニケーションが難しく、昼間も頭から布団を被って寝てばかりおられるような患者さんでした。また、ケアや介入に怒鳴り声を上げることがもあり、リハビリにも消極的でした。

難聴や糖尿病からくる視力低下、認知症による記憶力や状況判断能力の低下が、周囲との関わりを難しくしている原因であると考え、筆談時のペンの色を変え、状況説明をこまめに行うよう工夫しました。また、気分のムラもあるため、こまめに訪床して反応を観察し、無理のない関わりから離床を進めたところ、セラピストとの間になじみの関係を築くことができ、車椅子での散歩や立位訓練が実施できるようになりました。現在は、集団体操への参加やデイルームでの昼食も可能となってきています。今後は、施設入所に向けたADLの改善と、コミュニケーションを図る上での注意点などを情報共有していきたいと考えています。(作業療法士 棚田 万理)

第21回住民医療フォーラムのお知らせ

日時：平成30年10月18日(木)午後3時30分～

内容：「知らないと損する**糖尿病の最新の話**」－元気で長生きできるコツ教えます－

福井 道明 先生(京都府立医科大学 内分泌・代謝内科学 教授)

平成30年度第2回 地域包括ケア病棟“彩り”『事例紹介・情報交換会』のお知らせ

以下の日程で平成30年度第2回 地域包括ケア病棟“彩り”『事例紹介・情報交換会』を開催する予定です。前回は土曜日の午後で開催したのですが、今回は平日の午後で開催します。曜日の兼ね合いから前回の参加が難しかった方など、奮ってご参加下さい。もちろん、前回ご参加頂いた方のご参加も大歓迎です。詳細は改めてご案内させていただきます。

日時：平成30年11月29日(木)午後2時00分～午後4時00分

問い合わせ先：直通電話 0774-73-1818 (担当：中野・中嶋)

～老健やましろについて～

当院併設の老健やましろは、入所定員 100 名、通所定員 20 名の施設として平成 19 年 3 月に開設しました。開設し、今年で 11 年目になりますが、老健やましろの役割などについて改めて頂くため、老健やましろの三村管理部長より、老健やましろについて説明してもらいます。



(地域医療連携室 ソーシャルワーカー 中野 明子)

老健は、日常生活に不安を抱える高齢者の自立を支援し、家庭生活への復帰・継続を目指す施設です。「病院に入院し、病的には退院可能になったが、足腰が弱くなって、自宅での生活が不安…」 「自宅は暑いので、もう少し季節が良くなるまでリハビリを続けたい」等の理由から、退院後に老健への入所を希望される方も大勢いらっしゃいます。

病院から老健へ入所される場合、スムーズに施設生活へ移行できるよう、老健の支援相談員が入院中の病院へ面談に寄せて頂き、入院生活の状況を確認し、その情報を基に多職種で施設サービス計画書を作成します。また、在宅復帰希望の方については、入所後すぐに、リハビリスタッフやケアマネジャーがご自宅を訪問させて頂き、在宅復帰にあたりどのような課題があるのかを確認し、ご本人、ご家族とも相談を重ねながら課題の解決に取り組んでいきます。その後、2～3ヶ月のリハビリを重ね、退所前にもう一度ご自宅を訪問し、安心して在宅復帰ができるよう、居宅のケアマネジャーらと最終調整を図っています。老健退所後に、老健のショートステイや通所リハビリ等、老健の在宅サービスを継続して利用される方もいらっしゃいます。

地域の皆様が、住み慣れた環境で長く生活できるよう、老健やましろも様々なかたちで支援できればと思っています。(老健やましろ 管理部長 三村 裕子)

～患者さんの人生に関わらせてもらえることに、感謝して～

患者さんの想いを汲み取って支援することは大切なことなのですが、日々のソーシャルワークでは、現実とのギャップを感じることもあり、これで良かったのかなとモヤモヤとした気持ちになることがあります。地域の皆さんも利用者さんとの関わりの中で、同じような気持ちになられることがあるのではないのでしょうか。

がんや認知症の患者さんの中には、サロンや認知症カフェなど様々な機会でご自身の体験や生活で困っていることなどについて語られている方がおられます。患者さんご自身の直接の声を聴くと、患者さんに対してソーシャルワーカーの立場からどんな支援ができるのかと改めて自問自答してまいります。そして、患者さんの想いを汲み取った支援が大切であることに改めて気付かされます。

私は、学生だった 20 年程前、白血病を発症し、闘病していた時期がありました。幸い、骨髄バンクのドナーから骨髄移植を受け完治し、現在に至っているのですが、当時の多くの医療スタッフが私の治療（人生）に関わって頂いたおかげで、以降の私の人生は“彩り”豊かになりました。

地域包括ケア病棟という場所で、患者さんのほんの一部に過ぎませんが、日々のソーシャルワークを通じて患者さんの人生に関わらせてもらえることに感謝しつつ、患者さんの想いを汲み取ることを忘れず、業務に励みたいと思っています。そして、患者さんの人生が少しでも“彩り”豊かになるお手伝いできれば幸いです。(地域医療連携室 室長 南出 弦)